

横超慧日編著

「法華思想」

勝 又 俊 教

法華経は佛典の中では古来最も著名なものの一つであり、それが仏教の思想史・文化史の上に及ぼした影響はまことに計り知れないものがある。法華経の成立以後のインド・中国・日本の仏教の教学と信仰は法華経を抜きにしては語る事ができないと言っても過言ではないであろう。しかし最近では、天台宗や日蓮宗以外の人々は直接に法華経を所依の經典としない關係上、関心を示しつつも、あまり読誦しあるいは深く研究するものが少い傾向を示している。これは広い意味での仏教思想の研究のためにも、また法華思想の公平な取扱、正しい理解のためにも希ましいことではない。

このたび編著者は自ら多年に亙る法華思想研究の蘊蓄を傾けると共に、また多くのすぐれた法華思想研究者の協力を得て、法華思想の総合的研究の成果を公刊せられたが、しかもそれが編著者の還暦記念の出版とせられたことはまことに意義深いものがある。

第一部は「法華経総説」（横超慧日博士執筆）と題し、序章と三章とから成っている。序章では、一、「日本文化と法華経」二、「各宗祖師の法華経受容」三、「法華経と阿弥陀佛」との三項にまとめ、日本文化史に及ぼした法華経文化の種々相や、各宗祖師の法華経受容の態度を概観し、とくに法華信仰と浄土

教の信仰とは従来とかく相対立するごとく見られているが、しかしこの両者の信仰は決して相反するものでない点を佛陀觀の上から論究している。

第一章「諸品の要旨と問題点」は、法華経の諸品の要旨と問題点をきわめて要領よくまとめて叙述したもので、百五十余頁に及ぶ長文の章である。「各品の要旨」は法華経の本文の趣意をわかり易く説いたもので、この要旨だけを読むことによつて法華経の各品の内容をほぼ推知することができるが、その「問題点」は著者の法華研究の成果であり傾聴すべき点が多い。例えば方便品は開權顯実、開三顯一、如来の出世本懷顯示などを表明しているが、法華経の根本精神は全くこの一点に尽きるという、この一乘佛教の主張の背景には大乘の立場から小乗の説一切有部の説を批判するという歴史的役割を果していること、また三乘方便一乘真実ということ覚りの境地は絶対普遍的な一であるということの意味が含まれていること、また方便品の説が浄土教の信仰にとっての一つの重要な基底を与えるものであることを指摘している点などは注目すべき見解である。また提婆達多品において、極悪人の提婆達多も法華経力によつて成仏せしめられるという考え方から、釈迦佛の善知識とせられる説が成立したこと、龍女成佛の説話に因んで女性成佛の問題を論じている点など、また如来寿量品においては、生滅する佛の根底に生滅を超えて智慧と慈悲の根元たる本願としての佛を考え、この久遠実成の無量寿なる佛が有限の寿命をもつて現われる所の方に方便佛身が考えられ、この両者の關係を本迹として結びつけ

ている点を詳細に論述している点、囑累品についてはこの品の位置について論じ、法華經の成立過程についての見解を述べ、また薬王菩薩本地品に説く女性の弥陀極楽浄土往生信仰について論じている点など注目すべき見解を示している所が多い。なお以上の全体を通じて、法華經の構想を論じ、法華經の原型態と発展型態に論及している点などが諸処に見られる。

第二章「インド仏教学上における法華經」のうち、一、「初期大乘經典と小乘批判」では、般若、維摩、華嚴の諸經典が菩薩行を明らかにしながら声聞小乘の思想を批判している点を明らかにし、二、「法華經における小乘批判」では、それらの經典より一步進めて法華經では佛陀觀の上で小乘批判をなすに至ったこと、またその佛陀觀の問題は涅槃觀の問題とも密接な関連性があるとし、法華經の諸品を検討して、小乘の涅槃觀を徹底的に否定している点を解明している。三、「涅槃經・勝鬘經と法華經」では、涅槃經は法華經の声聞成佛の文を引用してやがて悉皆成仏思想を展開している点、勝鬘經もまた法華經の後をうけて如来藏思想を中心として成佛の可能性を明確にした点などを述べ、四、「智度論における法華經」では、法華經の引用文のうち、とくに二乗作佛の引用文を中心として法華經と智度論との関係を明らかにしており、五、「世親の法華經論」では、この論書の内容を紹介し、とくに七喻、三平等、六処授記、四種声聞、十無上の説に注目している。

第三章「中国における法華思想史」のうち、一、「鳩摩羅什翻訳時代の法華教学」では、1、鳩摩羅什、2、僧肇、3、竺

道生、4、道融、5、慧観、の五学者の法華經研究の状況と特色とを明らかにし、二、「開結二經と提婆達多品」では、1法華の開結といわれる無量義經の成立と訳出について、2、法華の結經といわれる観普賢經の成立と訳出について、3、提婆達多品の訳出と、それが法華經の中に挿入された事情について述べ、これらの經典がいずれも羅什の法華經訳出後に現われて、後世になると法華經を論ずる者にとって重要な問題となった点を指摘している。三、「中国における法華經研究」では、(1)総説で南北朝時代から唐代に至るまでの法華經の研究について概説し、それらの中、最も注目すべき研究者は次の四師であるとし、順次に、(2)法雲、(3)吉藏、(4)智顛、(5)窺基の著作と法華解釈の学説を紹介し、最後に(6)四師の結要を述べている。このうち、光宅寺法雲については現存する法華義記八巻の内容を紹介しつつその思想的特徴を指摘する方法をとり、嘉祥大師吉藏については、その著作たる法華玄論十巻、法華義疏十二巻、法華遊意一卷、法華統略六巻と、世親の法華經論に対する現存唯一の注釈書たる法華論疏三巻とをあげ、それらの内容を紹介しつつ、吉藏の学説の特色を指摘している。天台大師智顛については、まずその師たる慧思の法華研究と得悟の事情や悟境や行法を明らかにし、ついで智顛の著作たる法華玄義十巻、法華文句十巻、摩訶止観十巻を中心として、その内容を紹介しつつ、彼の法華觀の特色を明らかにしている。また慈恩大師窺基については、彼の著作たる法華玄贊二十巻と大乘法苑義林章の諸篇章などによって法相宗の立場からの法華觀を詳説しているが、

とくに五姓各別説を立て、三乗差別を真実とする立場から見て法華經の一乘真実思想をどう解釈するかについては、凡夫から直ちに佛果を求める人に対しては、仏に成る者もあれば、成り得ぬ者もあり、その立場では一乗は方便説であるが、小乗から大乘に転向して佛果を求める人に対しては一乗が真実であって二乗は方便説に過ぎないと説いていることを明らかにしている。その他、法華論によって法華經を解釈する態度や、漢字の訓詁を重んじている点、添品法華經を見て、その知識を活用している点、法華經の成立に関する問題点を論じている点など、とくに窺基の学説については詳説されている。

第二部「思想と展開」では、横超博士の論文の他に他の八人の学者の論文をも集録して、諸方面から法華思想の成立と展開を究明したものである。まず第一章「法華經の根本思想」のうち、第一節「方便と真実」（雲井昭善博士執筆）では、法華經の思想の中でとくに重要な意義をもつ方便と真実の関係について、(一)方便と真実とが対照的に扱われ、方便を超えて真実に至るといふ意味が、(二)方便は真実と対立的なものではなく、方便は真実の中に収まるものなのか、(三)方便も真実も佛智の世界内においてのみ言われるものなのか、などの問題を設定しながら、方便の語義を明らかにし、方便思想とその展開を諸經論によって究明し、法華經における方便と真実の思想を方便品と如来寿量品とを中心として検討し、会三帰一の思想と、本迹思想とを明確にしている。

第二節「一乗と三乗」（藤田宏達博士執筆）では、一乗とは何

か、三乗とは何か、この二つの問題の意義を法華經諸品の中に探査し、さらに部派佛教における三乗思想を明らかにし、さらに遡って原始經典の中に、「声聞乗と佛乗」、「独覺乘」がどのように説かれているかを多くの資料に基づいて究明している。また法華經に説かれている佛乗、大乘、菩薩乗、一乗の用語例とその意義を明らかにし、ついで「一乗思想は部派佛教における三乗差別觀の批判に基盤をおきながら、同時に部派佛教における三乗の存在意義を認めて包摂する宥和の思想を表明したものである」といい、この一乗思想は結局空無差別思想の實踐的展開を示すものであるといい、一乗対三乗の思想は一乗思想の内容を絶対的立場におくか相対的立場におくかによって、四車家のな見方も三車家のな見方も成立つという見解を示している。

第三節「法華經の佛身觀」（横超慧日博士執筆）では、法華經の中に新古の層があり、最古層と推定される方便品等では声聞成佛を主題とし、そこに説かれる佛はすべての衆生を自己と同じ佛たらしめようとする大悲心そのものをさしており、その趣意を強調するために、諸佛、過去佛、未來佛、現在佛、釈迦佛の五佛という形式をとった。ところが化城喻品になると、過去無量劫の昔の大通智勝如来とその王子たち（十方諸佛となる）の説話で表現し、五百弟子受記品になると、富樓那は応化声聞（内秘菩薩行外現是声聞）とせられ、見宝塔品になると、法華經の真実性、普遍性を実証するため多宝佛と釈迦佛との塔内並坐の形で示し、如来寿量品になると、久遠実成と伽耶近成の本迹二身説を明らかにしたが、これらは要するに、大悲心こそが

佛としての根本であり、一切の諸佛はみなその大悲心即ち本佛の現われに外ならないと断定したのが法華經の佛陀觀であることを六項目に分けて説いている。

第四節「菩薩行」（紀野一義氏執筆）では、法華經に説かれている菩薩とは佛塔信仰を中心とし、比丘教団から独立し、大悲心をもち、柔和忍辱の心をもち、一切法空の境地に入っている人々であり、その代表者の一人として、人間のいのちを讃え、人間を礼拝しつづける常不輕菩薩こそ法華經を信する行者であるとなし、さらに菩薩行としての法華三昧については、法華經における法華三昧（現一切色身三昧）と、慧思の考えた法華三昧（有相行と無相行）との二種あることに注意し、さらに柔和忍辱の心や一切法空の境地についてもきわめて流麗な文学的表現をもって説明している。

第五節「法華經における現世利益」（横超慧日博士執筆）では、まず現世利益と現世利益との意味の相違を明らかにし、方便品以下の数品では、佛の大悲本願たる一乗を信することによって心身安穩という現生の利益と未来成佛という後生の利益が得られることを説き、そこにはいわゆる現世利益的な感じは全くない。しかるに法師品以後になると經典の普及を勧めることに重点がおかれ、さらに分別功德品以後になると經典受持に対する現世利益の強調が濃厚となり、殊に藥王菩薩本事品、觀世音菩薩普門品、普賢菩薩勸発品などになると、往生淨土と生天思想が説かれ、病即消滅、不老不死、除苦滿願の思想が強調されるに至り、法華經の信仰には複雑な要素を含むことを指摘し、

「学者や純粋な信仰者は方便品や如来寿量品を中心とする部分から切実な功德を見出し、多くの大衆は流通普及のために累加された末尾数品の文に従って利益を求めていたのではなからうか」と結んでいる。

第二章「法華思想の展開」のうち、第一節「法華經と天台教學」（安藤俊雄博士執筆）では、法華經の組織的研究はインドよりむしろシナの学者たちの間で活潑に行われたとして、多くのシナの法華研究者の名をあげ、中でも天台大師智顛の法華研究は最もすぐれたものとし、ついで彼の著作たる天台三大部といわれるものの中、法華文句は經文の綜合的立体的解釈をしたもの、法華玄義は法華經の教學を体系づけたもの、摩訶止観は法華經の觀心法門を体系づけたものであるとし、この天台三大部によって理論と実践の二種の法門が完備したとなし、最後に彼の法華學の根本的立場が主体主義にある点を論じている。

第二節「中国佛敎と法華經の信仰」（道端良秀博士執筆）は中国庶民社会における法華經の信仰の種々相を明らかにしたもので、燒身供養、燃指供養の実例をあげ、また聞經の功德によって多くの利益を得た話をあげているが、また「南無妙法蓮華經」の唱題を聞いただけで地獄の苦しみを免れたと説かれていることは日蓮の唱題と関連して大いに注目すべきことだと指摘している。その他、法華經の随喜の功德や供養礼拝の功德の話、多宝塔の信仰があったことをあげている。また法華經變文と變相図とが法華信仰の普及に大きな役割を果たしたことを明らかにしている。

第三節「日本佛教における法華思想」(石田瑞曆博士執筆)

では、日本における法華思想の展開に著しい業績を残した聖徳太子と最澄と日蓮の三人をとりあげ、それらの人々の著作と、法華思想の理解の仕方、その思想的展開などを明らかにしている。そしてわが国における法華研究の流れは、迹門から本門へ、本門から観心へと展開していったことを指摘している。

第四節「日本文学史上の法華経」(多屋頼俊博士執筆)では、一、法華経の書写・読誦に関する説話、二、法華経の講讀と貴族の生活、三、法華経関係の詩文・伽陀・教化、四、法華経関係の和歌・法文歌、五、平曲・宴曲・幸若舞曲・謡曲と法華経の諸方面から、法華経が日本文学史上に大きな影響を与えたかを具体的に明らかにしている。

第五節「創価学会における法華経受容の形態」(竹中信常博士執筆)では、まず創価学会の教学面は御義口伝と本因妙抄と百六箇抄の三部の書に依っていることをあげ、ついで法華経に三種ありとされるが、「種本脱迹の勝劣判」が行われて、末法の法華経は「文底下種の法華経」といわれ、「南無妙法蓮華経の七文字の法華経」ともせられていること、また「宗祖本佛論」を提起して、末法の御本尊は釈尊でなくして日蓮大聖人であると主張していること、また三大秘法についても特異な解釈をしていることを指摘し、そこにとられた法華経受容の態度はきわめて独自の・集約的であり、過度に演繹的であることを注意している。

また創価学会では法華経より日蓮の著作を重視していることを統計的に明らかにし、また法華経系の教団が発展しつつある

理由については、法華経のもつ現世利益的信仰という性格や、一般的世俗的受容性があることがあげられている。

以上が各章節の概要であるが、それらの中には法華思想研究の最高水準を示す諸説が多く展開されていることは、本書の学的価値をいよいよ高からしめているといえよう。また第一部を「法華経総説」と題して、まず法華経の内容を明確にし、問題点を追求すると共に、法華経がインド佛敎と中国佛敎史上に与えた影響を思想的に解明し、第二部を「思想と展開」と題して、まず法華経の根本思想を五つの問題点としてとりあげ、ついで法華思想の展開を中国・日本における敎学、信仰、文学などの諸方面に互って跡づけている点、法華思想の総合的研究として編集上にも妙を得て完璧であるといふべきである。これによって読者は法華思想研究の深さと幅の広さとを知らしめられるのみならず、また法華思想は特定の宗派のもつ特殊な思想であってはならないという編著者の企てが美事に成功しているともいえよう。ただ編著者もいわれるように、本書は漢訳の妙法蓮華経を中心としての研究であるために、梵文法華経の研究の方面や法華経成立の問題などインド佛敎教学上の諸問題にふれる所が少いが、これらの点は他の著作に待つこととして、兎も角、これだけ充実した法華思想の研究書が公刊されたことは学界のため誠に喜ばしいことである。私は編著者と協力者に深く敬意を表するものである。

(昭和四四年五月一日、平楽寺書店、A5版、三、五〇〇円)